
寄りあいNIPPON

いしのまきワークショップ

～子どもと子育て、若者の現在とこれからを共に考える～

第1回 報告書

1. 概略

日 時：2014年6月24日(火)10:00～12:30

場 所：石巻市 遊楽館 宮城県石巻市北村字前山 15-1

主 催：寄りあい NIPPON 実行委員会

共 催：一般財団法人 地域創造基金みやぎ

後 援：石巻市・石巻市教育委員会

協 力：特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク

参加者：42人

石巻市内で活動されている方：23人(内、行政関係職5人)、市外10人、スタッフ9人

2. 開催趣旨

この度、「寄りあい NIPPON 実行委員会」は、2013年9月に開催した第1回「寄りあい NIPPON ～東北から日本の未来を創造する円卓会議～」の続きとして、「子どもと子育て、若者」に関して地域や子ども・若者が直面している困りごと等を整理・提起するための第1回のワークショップを石巻にて開催します。

私たちが目指していること、それは石巻市を含む東北の復興に使える資源(人、資金)を増やすことです。震災から4年が経過し、「大変!」ということだけでは資金や関心が集まらないなかで、「4年目の今、何が起きているのか」、「どういうことが取り組まれているのか」、「そのうえで、いくらあると、どういう変化が期待できるのか」そのような質問への回答・提案が必要な状態です。

一つ一つの団体・組織での取組みも大事ですが、地域として共通している要素や状況を浮かび上げらせるために、特定の専門家、特定の組織・機関だけの取組みではなく、それぞれ支援に取り組んでいる現場(民間・行政を問わず)の視点を重ねていくこと、そこで浮かび上がる“いしのまきの地図”が大事ではないかと感じています。批判等ではなく、まずは現状を確認すること、視点を重ねること。

石巻の「子ども・若者、子育て」支援をしている立場の方々に、幅広くご参加を頂き、今石巻でどのような困りごとがあるのか、状況を確認することから次の打ち手を共に考える場にします。ぜひ、皆様のご参加をお待ちしております。

3. 今後の予定

8月～9月：第2回 寄りあいNIPPON いしのまきワークショップを開催予定

4. 当日の進行

- 9:30 開場
- 10:00 開始・開催趣旨説明
- 10:15 田村太郎さん 論点整理「復興支援における子ども、子育て支援の大切さ」
- 10:45 世代に分かれてのワークショップ（5テーマ、6グループ）
乳幼児、小学生世代、中高生世代、20歳前後&大学生、20代
- 12:00 グループごとに視点の共有
- 12:45 閉会

話題提供

田村 太郎さん（一般財団法人 ダイバーシティ研究所 代表理事）
（復興庁 復興推進参与）

スタッフ

青柳 光昌（公益財団法人 日本財団）
日高 将博（公益財団法人 日本財団）
菅野 拓（一般社団法人 パーソナルサポートセンター）
鷹野 秀征（一般社団法人 新興事業創出機構）
靱島 一匡（公益財団法人 共生地域創造財団）
青木 ユカリ（コミュニティ・ワークス主宰）
鈴木 祐司（公益財団法人 地域創造基金さなぶり）
吉田 庸子（公益財団法人 地域創造基金さなぶり）



5. 冒頭：論点整理・田村 太郎さん

論点整理「子ども・子育て支援と復興について」

ダイバーシティ研究所の田村と申します。東日本大震災では民間人としての他、復興庁の非常勤職員という立場も持ちながら復興に関わっています。元々は阪神・淡路大震災の時に地元で活動していました。阪神大震災から来年の2015年1月で20年になります。皆さん、3年で疲れている場合ではありません、20年はがんばりましょう！

子ども、子育て支援というテーマで今日はお話しをしますが、復興庁の方で仕事をしても、「住宅再建」や「産業復興」という声と比べるとなかなかこのテーマは聞こえてこないなあという感があります。

1995年に発災した阪神・淡路大震災ですが、私はその当時、外国人支援を行っていて、相談活動も行っていました。相談に対応をする際、相談している人が「自分はここにいていいんだ、承認されているんだ」と感じてもらうことがすごく大事なことで気づきました。子ども・子育てのことが復興計画に入っていない、大事にされていると感じられないと、子どもや子育て中の親が「自分のことが大切にされている、尊重されている」と感じられないかもしれない。復興計画では住宅の再建とか産業の再生という言葉は聞かれますが、子ども・子育てという言葉がなかなか聞かれませんか。

そこで今日は、子ども・子育て支援をどう復興支援に位置付けるのか、という視点から話しをさせていただきます。

最近私は「子ども、子育て世代が戻ってこない復興はもっと遅れますよ」という話しを色々なところでしています。残念ながら、復興は、ハードでいうと住宅が先、次が商業施設、最後に文化教育施設という順番に、どうしてもなってしまいます。それは仕方がないといえば、仕方がないかもしれない。例えばいま仮設住宅が建っている場所・土地とい



うのは、おおよそ半分くらいは公園や学校のグラウンドなどで、以前は子どもの遊び場になっていた場所です。子どもが遊んでいた場所に仮設住宅が建っていて、住宅の再建が進まないで遊び場が戻ってこない。そういう意味では住宅が先というのはしょうがないかもしれません。どうしても公的な復興のスケジュールというのは、そういう形になってしまっています。

しかし、子育て世代の存在は地域の復興にとってとても重要なものです。最近になってようやく水産加工場等の再建がされてきましたが、従業員を募集しても集まらないという状況が生まれています。なぜかという、特に水産加工場などでは、パートで働いていた女性が従業員の主力であったはずですが、その女性達の多くは子育て世代で、子どもが小学校に行っている間にパートで働くという方も少なくなかった。子育て世代への支援がないと、その世代が街に戻ってこられない。そうすると水産加工場が再開しても、働く人がいない状態が生まれるということです。復興の中に「子ども・子育て支援」を入れることは、産業の復興においてもとても重要であるということです。

過去の震災復興と東日本大震災の違いとして、色々なことが指摘されていますが、それ

は東北か阪神・淡路かといった地域性の問題だけではありません。今回は日本全体のバランスが崩れています。横浜市で待機児童ゼロということが言われていますが、実際に横浜市の担当課が何をやっているかという、全国、実際は地方から、高い給料を払うから横浜に来てねということで保育士資格を持っている人をどんどん集めてきてようやく実現した。東京都もそれをまねしようとしている。このままだと地方から保育士さんがどんどんいなくなってしまう。今の日本では、被災地に限らず、都市と地方との間に非常に不均衡な状態が拡大してしまっているということです。これまでの復興と比べて、今回の復興は人の面でも、お金の面でも、順番の面でも、いままで以上に子育て支援をしっかりと入れていかないと、前に進みません。そういうことをしっかりと言わないといけなく強く感じます。

これまで、皆さんが取り組んできたことは、当然、子ども達のためにやっているのですが、子ども達のためにやるのが復興全体を考えたときにも、ものすごく大事なことなんだと胸を張って訴えて頂きたいと思っています。私たちがやっていることは地味に見えるかもしれないけれど、石巻市の未来にとって、とても大事なことをしているのだと。それは間違いありません。子育て支援をしなければ、10年後の石巻市は無いといっても過言ではないのです。

配布資料に石巻市の震災前後の人口の変化についてのグラフをつくってみました。高齢者の人口は戻ってきていますが、子どもと子育て世代が戻ってきていません。子どもは5歳～9歳で900人減少、30代前半は1000人も減少しています。このことが非常にこれからの石巻の復興にとって重しになっていくのではないかと考えています。もちろんこれは、石巻市に限ったことではなく、他の東北の地域、もっといえば全国の他の地域全体に

言えることでもあります。高齢者世代の人口は回復しているのに、子どもや子育て世代は減少したまま、という点は今後の復興を考える上で重要な課題です。

配布資料の下の図は、震災直後からお話ししている復興の踊り場についてのものです。今はまさに踊り場だと思います。今日来られている方々は、子ども・子育て支援をなさっている方かと思いますが、これまでの活動を今後どうやって地元の人に引き継いでいくかが重要になってくる時期です。外から来た人がずっと支援をし続けていくことは、これからは難しくなるのではないのでしょうか。踊り場の時期にきちんと地元の人に引き継いでいけるかどうか重要だと思っています。

東北においては、被災した太平洋沿岸部の方が子育て支援の取組みがより多く行われているかもしれません。例えば宮城県なら内陸部にも発達障がいの子どもや不登校の子どもなど、支援が必要な子どもが少なからずいますが、沿岸部は震災でももちろん大変な状況があったわけですが、一方で仙台から、あるいは東京や大阪から大学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんがたくさんきて遊んでくれ、外部からたくさんの支援が入りました。被災しなかった地域よりも豊富な支援が展開されているわけです。

この踊り場の時期に、こうした支援をいかに地元へ引き継げるかが、これからの子ども・子育て支援においてとても重要です。この後のワークショップでは、もっと具体的な子どもが直面している課題や変化の様子を共有してもらえればと思いますが、ぜひ復興のなかに、ずばっと突き刺していただきたいと思っています。

そのためにも、引き継いで活動を続けていく人とお金の問題が出てくるだろうと思っています。人に関しては、マネージメントが出

来る人材をどう確保していくかという点があります。これは、阪神・淡路や中越のころよりも日本全体の状況が変わってきています。先ほどの保育士さんの例で言えば、ほっておくと全国の保育士さんが横浜市や東京都等の都市部に引き寄せられてしまいます。もう一回、どうやって東北に来てもらうか本気に考えなければならず、過去の震災とは全く違うレベルで考えなくてはいけないと真剣に思っています。地元のコミュニティでの自治だけに任せずに、外からもう一度人を呼んでこられるか、呼ぶために何が必要かという視点が重要だと感じています。もう一つはやはり資金です。先月末に同じ会場で、内閣府の子ども・子育て新制度の担当の人に来てもらい、説明会をやって頂きました。来年度から、子ども・子育て制度が大きく変わります。変わる中に、皆さん方が今取り組んでいる取組みが、その制度のなかで拾えるものがたくさんある。今までは、外からの助成金や寄付で取り組んでいた活動のうち、今後は安定的に地域でやれる活動として転換していくことができるものも、少なくないだろうと思います。ちょうど、今そういうタイミングです。復興の踊り場と、子育て制度の変更が重なっているわけです。来年度のことを考えますと、議論のタイムリミットは今年度中ではなく今年中が勝負です。今日は行政の方もお越しですから、しっかり議論をして頂きたいと思っています。今までは、外からの寄付や助成金でおこなっていた活動を、しっかり地元に着していけるように変化していくこと、これが大事です。

まだもう少し民間のお金もあるにはあります。そうした資金を地元を持ってくるには、「今復興で一番大事なのは子ども・子育て支援なんです」と言って、その根拠をしっかりと提示できることが大事です。そのためには、どれくらいの規模の、どんな活動に、どれく

らいの資金が必要なのかを、きちっと提示していかないとはいけません。それが提示できれば、まだ民間の財源もあるのではないかと思います。みなさんがこれからお話しをされる子どもの具体的な課題についてのディスカッションでは、お金や人のことまで議論できなかもしれませんが、踊り場の時期に、今まで取り組んできた活動がしぼんでしまって、「石巻では子育て出来ないな、このまま仙台や東京に居ちゃおうか」、という人をいかに少なく出来る。そのために、人とお金がすごく大事なと思いますので、今日出てきた課題をぜひ整理して、どういうお金が、どれくらい必要かをぜひ整理して頂きたいと思います。今日これからの話し合いにおいて、ぜひ頭の片隅に置いてくださるとうれしいです。

●添付資料「子ども・子育て支援と復興について」

1. 子ども・子育て支援と復興をめぐる課題

子育て世代が戻らないと復興はさらに遅れる

復興はまず「住宅」、次に「商業」の順に着手され、**教育や文化施設の復興は後回しになりがち**です。例えば、被災地全域で約5万戸の応急仮設住宅が建設されましたが、約半数は公園や学校のグラウンド、スポーツ施設など、震災前は子ども達が遊んでいた場所でした。

子育て世代は働く世代でもあります。父親たちはもちろん、母親たちも水産加工や農業などでも貴重なパート従業員でした。手厚い産業支援策で復興の入り口に立つ企業からは、「**人が戻らないので事業が再開できない**」という声も聞かれます。

さらに、円安による資材の高騰や人手不足による人件費の高騰は、保育園や幼稚園の再建に影響を与えています。また、子育て支援への全国的な気運の高まりで保育士など、**子育て支援の人材も不足**しており、その影響が被災地でも深刻化しています。



公園に建つ仮設住宅(福島県)

用地の種類	個所数
公園・広場	50
運動公園・グラウンド	50
学校・学校跡地	53
民有地	151
その他	15
合計	319

応急仮設住宅建設用地の種類別箇所数
(岩手県・「応急仮設住宅の建設に係る進捗状況について」より)

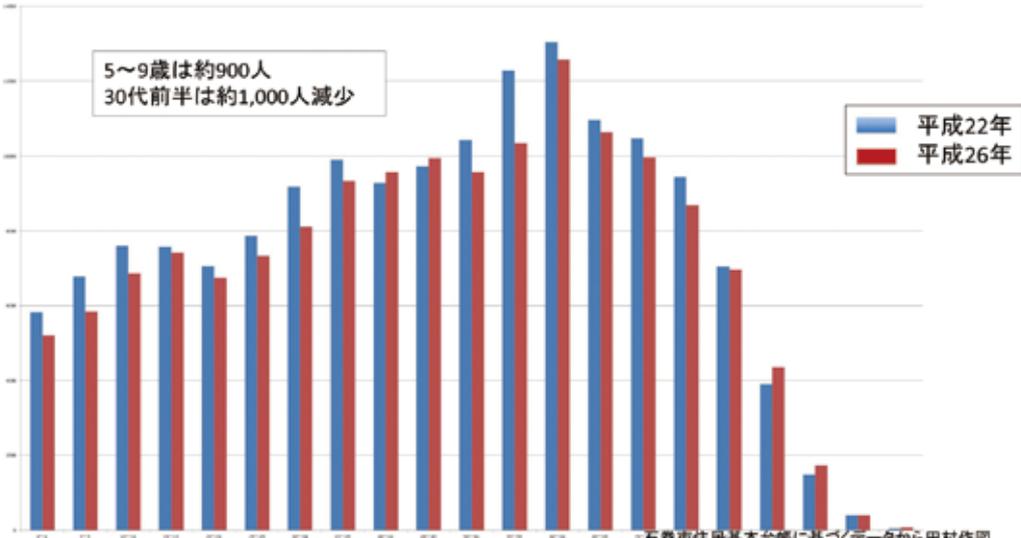
子ども・子育て世代への支援は、復興全体にとっても重要！

2

2. 子ども・子育て支援と復興をめぐる課題

データ: 石巻市の年代別人口の推移(震災前→現在)

→ 高齢者人口は回復しているが、子どもや生産年齢人口の減少は止まらず

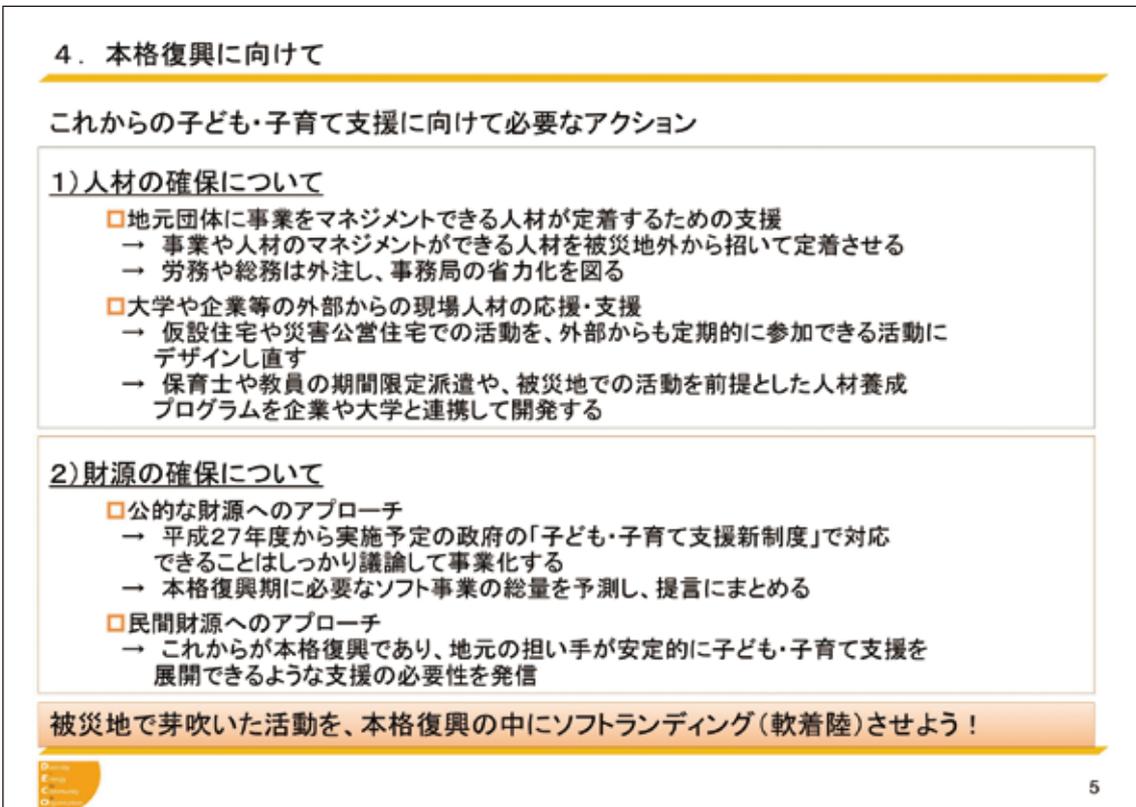
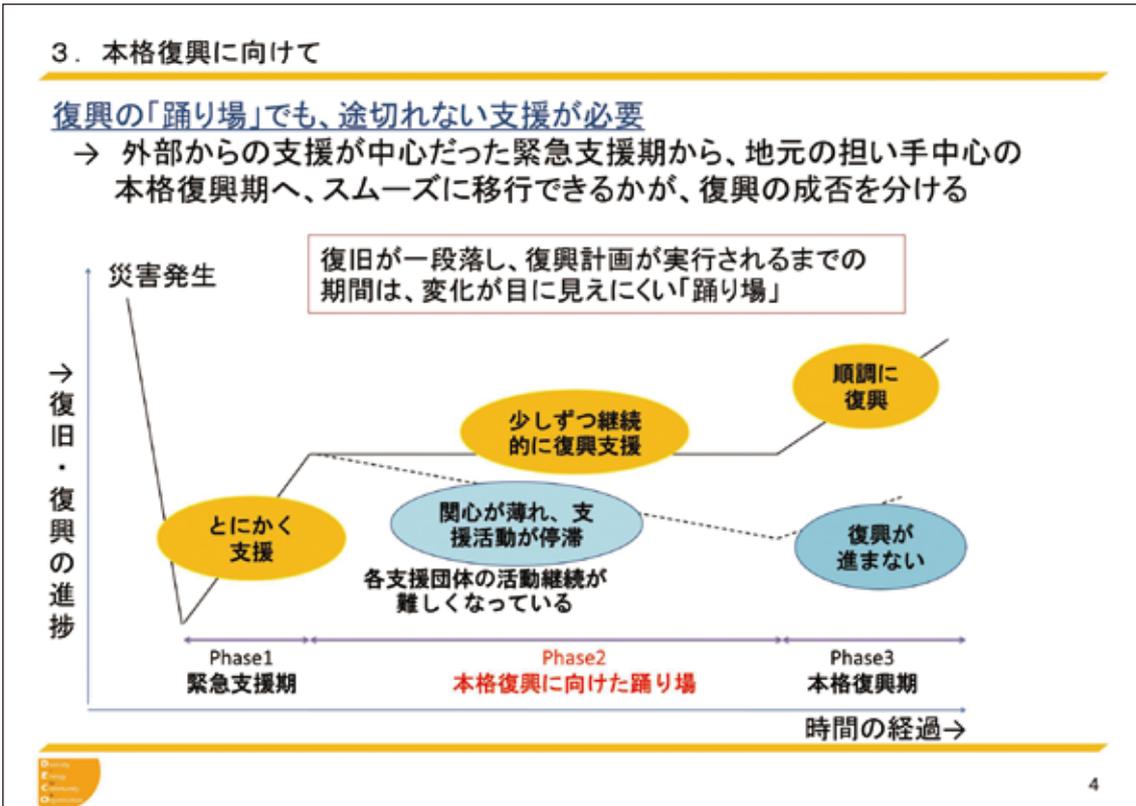


5~9歳は約900人
30代前半は約1,000人減少

平成22年 (青)
平成26年 (赤)

石巻市住民基本台帳に基づくデータから田村作図

3



6. 記録：年代別グループワーク発表

●テーマ：「これまでの3年の変化」と「これからの3年の変化」

※グループごとに発表をして頂いた内容のまとめ

A. 乳幼児＋親グループ

a)これまで（いい面）：

- ・子どものサポート団体が増えた。
- ・高校生が子どもの面倒を見るようになった。
- ・子どもや子育ての重要性。認知度が上がった。
- ・子育て支援センターの立ち上がり。
- ・出生率が上がっている。
- ・育メンが増えている。

b)これまで（悪い面）：

- ・仮設での暮らしが長引いていることによる親のストレス増。ストレス解消の場がない。サポートの相談相手少ない。
- ・コミュニティ離れ。元々のコミュニティで子育てができない。
- ・遊び場の環境がまだ整わない。
- ・出産できる施設が減ってきている。

c)これから：

- ・子育て支援と同時に「親育て」の重要性。
- ・地域の人つながりが大事。地域で支える子育てをどうしていけるか？
- ・「受援力（「サポートしてほしい」という声）」を上げる。
- ・子育てしやすいまちづくり。ハード面もあるが、子育てにやさしい「人づくり」が中心になる。みんなで勉強し合って、地域の環境を「人づくり」から支えていけるような取り組みをしていけるとよい。
- ・「怖いおじさん（怒ってくれる人）」が地域に必要。

B. 小学生グループ

a)これまで：

- ・子ども支援（遊び場づくり、居場所づくり、学習支援など）を通じて、大人の関わりが出てきた。子ども支援で入っているが、大人の交流が生まれてきた。子ども支援を軸にして、地域の関係性を作り直していくこと、改めて地域をつくっていくことに有効な切り口となりうる。
- ・外からの組織・資金・人材が多く入ってきた。外の支援が入ってきたことで、サービスを受けた子ども、一緒に関わってきた大人たちが外の視点で自分たちの地域を見つめ直したり、子どもが刺激を受けたり、目の前のことだけではなく少しずつ将来（中学生になったら、高校生になったらどうしよう）を考えるようになった。外の大人たちと触れ

合うことでそういう視点が見えてきた。

b)これから：

- ・地域づくりを主眼において、子どもの支援、そこには必ず大人も入るということをどのようにやっていくか。官民一緒になって取り組んでいきたい。
- ・まちづくり・復興計画（公式に採用されるかどうかはわからないが）に子どもの視点を盛り込んでいく。子どもたちでも参画できるチャンスをつくっていきたい。地域づくりを進めていく上での子どもの視点。大人も巻き込んでいく。
- ・活動の継続が課題。継続するには人材と資金が必要。これまでメインだった外部の人材と資金ではなく、いかに地元の人材・違う資金を取り込んでいくかが、組織・活動を継続していくことの課題。

C. 中高生グループ①

a)これまで：

- ・部活ができないことによる、放課後のモチベーション減。石巻では部活をやるのがスタンダードだった。その部分がなくなり、この先のステップに行ったときにどのような影響があるのかわからない。
- ・親自体の変化。生活再建や就業の問題などを抱えており、多感な時期の子どもが親に気持ちを打ち明けられない。地域でいろんな外部からの支援の担い手はあるが、やはり一番は、元気で受け止める親の存在が鍵。2年目以降、虐待等が増えたのは親の余裕のなさも一要因。
- ・子ども支援センターの役割のひとつとして、地域的な地域で支えるというよりは、広域的な課題に対して解決する機能が震災後できた。それを担っているのが、親に気持ちを話せない子どもたちの心にスッと入っていける外部の若い人材。それがこの3年の大きな変化。

b)これから：

- ・データの裏付けがない。アンケートの回答は基本親がしている。世帯収入や職業変化に関するものはあるが、それに紐づく「子どもの学力」や「自己有用感」というものなど連動したものがない。「仮設の子どもたちへ学習支援の場をつくったが、子どもたちの成績は結果どうなったのか？」というものがない。毎年アンケートが変わる状況だと、経年変化が見えず、今後の打ち手を取れないのではないか。

D. 中高生グループ②

a)これまで：

- ・元々（震災前）、石巻にはNPO少なかった。震災後、NPO、及び、子ども系NPOが増えた。
- ・石巻の特徴：高校がゴールという意識が親・子ともに多い。その後は、石巻から大学への進学などで、外に出た人がなかなか戻ってこない。

b)これから

- ・もっと人が戻って来れるような地域になるとよい。地元愛や潜在的に面白い場はあるので、もう少し人が戻って来れるような「地元愛教育」が必要。
- ・例えば「不登校」といってもいろんな活動があり、それぞれの団体の得意分野を生かしたネットワークづくりの重要性。
- ・家庭環境に問題がある場合も多いので、地域とのつながり、学校、市役所・NPOとの関係性作りがもっとできるとよい。

E. 大学生（20歳前後）グループ

a)これまで：

- ・石巻に学生の復興ボランティアがたくさん来てくれて、小さい子どもたちは遊んでもらえた。一方で、単位もからんでいるという情報もあり、受け入れ側は少々複雑な思いもあった。
- ・震災から3年という期間で、高校生から大学生、高校生から社会人という風に、大きく環境が変わり、公的な支援の対象から離れ、その狭間でケアが受けられなくなってしまった子どもたちもいる。
- ・当事者・周辺含め、地元への関心は増えた。多くの人の出会い、いろんな人との接点が増えた。反面、どこからの接点もない層も一定層ある。

b)これから：

- ・この世代・大学への期待値は高い。
- ・地元の企業世代交代。若い人たちの新しい発想や意見を取り入れていくことも起こってくるのではないか。
- ・大学も企業との連携をもっと考えていければいい。
- ・現状維持だとネガティブな部分が深くなるが、学生の選択肢と仕事と学びの環境、そこをつなげる大人の機関、それが先の仕事づくりにつながっていければよい。
- ・この世代は担い手にもなれる立場でもあり、まだまだ支えが必要な、両方にまたがる微妙な世代。周りの受け入れ団体も含め、支えることも必要なんだという認識を持ちながら、選択肢を増やしていくこと、つないでいくことをしっかりやっていくことが必要。

F. 20代グループ

a)これまで：

- ・20代をめぐる主役になっていくプロセス：暮らしが一番上。きちんとこの年代に住んでもらうことが大切ということはベースにあるが、さらにそこから何らかのきっかけも必要。
- ・動き出した20代：ソーシャルなことに参加し、多世代との関わりを持つなど、震災はそのきっかけを多く生んだ。外から人が入り、いろんな視点を持ちながら、石巻のよいと

6. 記録：年代別グループワーク発表

ころを認識し地域に愛着を持ち、地域の再発見につながる機会になった。

- その中で、「がんばるぞ！」という人もいれば、「ちょっと、しんどいよね」という人、両方いる。何等か社会に参画していくようなイメージのことが必要になっていく。
- とはいえ、活躍の場があって初めていろんなことができていく。もちろん、具体的な空間や行政の支援など、環境整備も必要。ただ、そういう場があって、いろんな人がネットワークをもちながら、社会に出ていく。もちろん呼びかけも同時に必要ではあるが、なかなか自分の力だけでは出ていけなくても、何かきっかけをうまく使えばそういう場は出てくる。
- 弱い人もいれば「がんばろう！」という人もいる。成人はしているが、未熟な部分もある。まさにの大学生などもそういう側面があるが、プロセスをめぐることで何等か入り込んでいけるのではないか。

b)これから

- 当然、ベースとしての暮らしがないとだめ。出産、子育て、生きる糧を得ないといけないう年代。
- 震災だからできてきたことがある。今後、外部からの支援がだんだんなくなることで、それを維持していくことが重要。「再現と増幅」。どういうことができて、どういう要素があって、だからできたこと、これからもそれをやっということがすごく大事。
- きっかけとネットワークをどうつくるか：他者を知ったり、よそ者と交わったり、そういうきっかけが必要。維持・継続していく場・仕組み・工夫。
- きっかけとネットワークがあって初めて具体的な環境整備ができる。地域を動かす力となる。
- 立場の違い（がんばれる人、しんどい人）があっても、基本的に共有できることはこういうことなのではと思っている。



7. 記録：年代別グループワーク発表（模造紙）

A. 乳幼児＋親グループ



これまで!!

- 2011～2013 子育て支援とは親やかんきょう支えることと気付いた⊕
- 安心かつ安全創造的な遊び場の増加
- 親の悩みを聞くことが育児ギャクタイ防止につながった
- 親のストレスが子どもに影響⊖
- 支援センターの役割
- 講演等に興味を持つ親が増えた
- 今だからこそ地域で子育てを!!
- 子ども支援がたくさん立ち上がった⊕
- ハード（道路、環境、バリアフリー etc）、ソフト（駐車場、自動者、専用）
- 震災を契機に子ども支援団体/NPOが増えた⊕
- 社会の課題に目を向ける人が増えた⊕
- 震災後石巻地域の子ども・子育て支援を目的とする団体が増えた
- 避難所では0～100才まで同じ場で生活し、支え合いをせざるを得なかった⊕
- 子どもが様々な大人と関わる機会が増えた⊕
- 子ども支援団体増加で笑顔増えてきた
- 保育サービスは増加した？微増 乳幼児少ない⊕
- 多くの子そだてサークルが出来ている

- 親育？
- 避難所にて中高生が小さい子どもたちの面倒を良く見ていた
- 多職種、まちづくりに想いをもつ人たちが外部から集まってきた⊕
- 子どもセンターができたが、今後各地域に必要！！
- 線量が心配で外あそびに連れて行けない
- できすぎなくらい良い子が多かった⊖←がまんしていた
- 親のリラックスできる場が少ない⊖
- 情報が届いてない
- あそび場があってもアクセスできない（車がない、交通インフラ被災）
- 仮設での子育て（特に乳幼児）に気疲れしている⊖
- 親のストレスが子どもたちに反映されている印象
- 被災により将来が不安定なため子どもに注力できない⊖
- あそび場がない。仙台まで行っていたらしい
- 住環境によってがまんしている親子
- 仮設の音問題子育てに不向き⊖

7. 記録：年代別グループワーク発表（模造紙）

- ・ 小学校教師がつかれすぎている印象。保育士さんも！！
- ・ 運動不足により太った子が多い
- ・ 家の中の方が見守りやすい
- ・ 家族構成が変わり父母、親せきからの子育てサポートが得にくくなった⊖
- ・ 幼児の発達に住環境に影響されて早く立ったりする
- ・ 親の生活状況が子どもにダイレクトに影響！！
- ・ 外に出てこない親子が心配
- ・ 未就学児の親のサポート少ない（相談相手）⊖
- ・ 子どもがいないけど、子育て応援に参加できることに気づいた。
- ・ 与えられることに慣れてしまった
- ・ 震災により転居をせまられ、元のコミュニティを離れる⊖
- ・ 各家庭によって災害から復興の状況に差が出た
- ・ 親のストレスが、一時的から、長期的に
- ・ 子ども子育て支援の必要性が改めて感じられた

これから！！

- ・ 地域への理解
- ・ 親（家庭）のサポートで赤ちゃんが生まれた
- ・ 住みよい街のビジョンの共有、地域で育てる？
- ・ イクメンが増える⊕
- ・ ママたちの勉強会、大切、子どもの権利についてなど
- ・ 受援力を伝える
- ・ さんきゅう（病気の時など）で子どもをあずかることで、仕事をもつ親の失業を防げる⊕
- ・ 出生率UP！
- ・ 産婦人科・子ども病院が増える
- ・ 安心して子育てできる場
- ・ 子どもを見守る大人の増加
- ・ 同年代の子がいる親同士の交流
- ・ 子育てにやさしいまちづくり…
- ・ 情報を得られる場所が必要発信する場
- ・ ママ団体が立ち上がった⊕
- ・ 怖いおじさんが増えてほしい！！
- ・ 人材育成
- ・ 子育てにやさしい人づくり
- ・ 子育ての地域化
- ・ 子育て応援企業増やす！！
- ・ 企業内託児所
- ・ 復興に子育て世代の女性の意見が反映される
- ・ 親へのアプローチを増やす！
- ・ 中遊び（子どもセンター）と外遊び（プレイパーク）両方併設して欲しい
- ・ 保育士など専門職の給与が安く、継続できない。
- ・ 乳幼児サポート団体・拠点がもっと増えて欲しい
- ・ 親子で集まれるサロンで親がリラックス！！
- ・ 地域とつながり支え合う
- ・ 出産できる施設、産婦人科が少ない（震災後とくに）⊖
- ・ 放射線の影響が今後どうなるか予測がつかない
- ・ 支援者（チーム）が引き上げた。集会所でのイベントがなくなり、住民同志のコミュニケーションの場がなくなり、老人のこどく死が出ている⊖



B. 小学生グループ ～これまで～



良かった点

- ・ 外からさまざまな人が出入りすることで、刺激を受けた
- ・ 将来の目標を持てるようになった。（子どもたちが）
- ・ 子どもたちが計画した花壇が見事に仕上がり活動を広げた（自発的、達成感）
- ・ ダンス教室ですばらしいダンス発表会を達成した（仲間づくり笑顔）
- ・ 子どものこころのケア（お菓子づくり）けんか・ぼう力→笑顔・人のためのお菓子
- ・ 集会所を使っただけ子ども支援+お母さんの働き場
- ・ 遊び場・居場所づくりなど子どもに関する様々なテーマをもつNPOが集まった
- ・ 今まで見えなかったもの（子どもの貧困、ギャクたい、不登校）がみえるようになった
- ・ 圧倒的な資金と志のあるスタッフをもつNGOが支援にやって来た
- ・ 仮設住宅へのあそびの出勤→笑顔
- ・ 乳幼児の母親たちの交流の場←あそび場が
- ・ あそび場が高齢者の楽しみの場
- ・ (仮設団地の) 集会所開放（世代を越えたつながり、子どもと高齢者など）
- ・ 子ども参加がすすんだ子どもたちがまちに関心をもつようになった。
- ・ 子どもたちが思いきり自由に遊べる場→公園がない、ストレス発散
- ・ 子どもたちが安心していれるあそび場づくり
- ・ 地域住民のボランティア参加が増えた
- ・ (各団地での) イベント
- ・ 子どもの遊び場づくりを核となってやってくださる方々がいること
- ・ 様々な支援により、子どもたちに活躍の場や貴重な経験をする場を与えていただいていること
- ・ 仮設住民の見守りの意識（すこーし）
- ・ 仮設住民が協力的になった
- ・ 笑顔になった
- ・ 落ちつきがでた

7. 記録：年代別グループワーク発表（模造紙）

チャレンジ

- ・ 学習の場（ふつうに勉強できる）
- ・ 神戸の震災経験者に話を聞く
- ・ 学校遊具支援、楽器
- ・ 学校引越しボランティア
- ・ 遺児、孤児支援交流会
- ・ 学校環境改善（マンパワーでできることより設備の復旧が残っている）
- ・ 地域と学校のつながりをつくる
- ・ 地域の子ども会の組織づくりと活性化
- ・ 石巻市外の支援者が支援のために訪れた、また、定着した
- ・ 課題解決のために、NPOをはじめ、地域の色々な方が取り組んだ
- ・ Eco キャンプ“自然とともに…” 開催（長野・牡鹿半島）
- ・ 鹿妻あそびの出前、定期開催
- ・ 黄金浜の常設あそび場づくり→子ども会「わらす会」
- ・ 仮設団地の子どもの居場所
- ・ 子どもダンス教室
- ・ 中学生「わたしたちにできる復興計画」
- ・ こどもまちづくりクラブ
- ・ 親子のコミュニケーション、コモンセンスペアレコーディングWS開催
- ・ 未就学児のあそび場と母親の交流の場づくり
- ・ 子育て相談
- ・ 子ども会の復旧（地域によってはまだ早い）
- ・ 学習支援
- ・ プレーパーク
- ・ (仮設) 継続的なお茶会仮設住民対象
- ・ (仮設) 継続的な遊び場づくり（居場所）
- ・ (避難所) 継続的な遊び場づくり（居場所）

B. 小学生グループ ～これから～



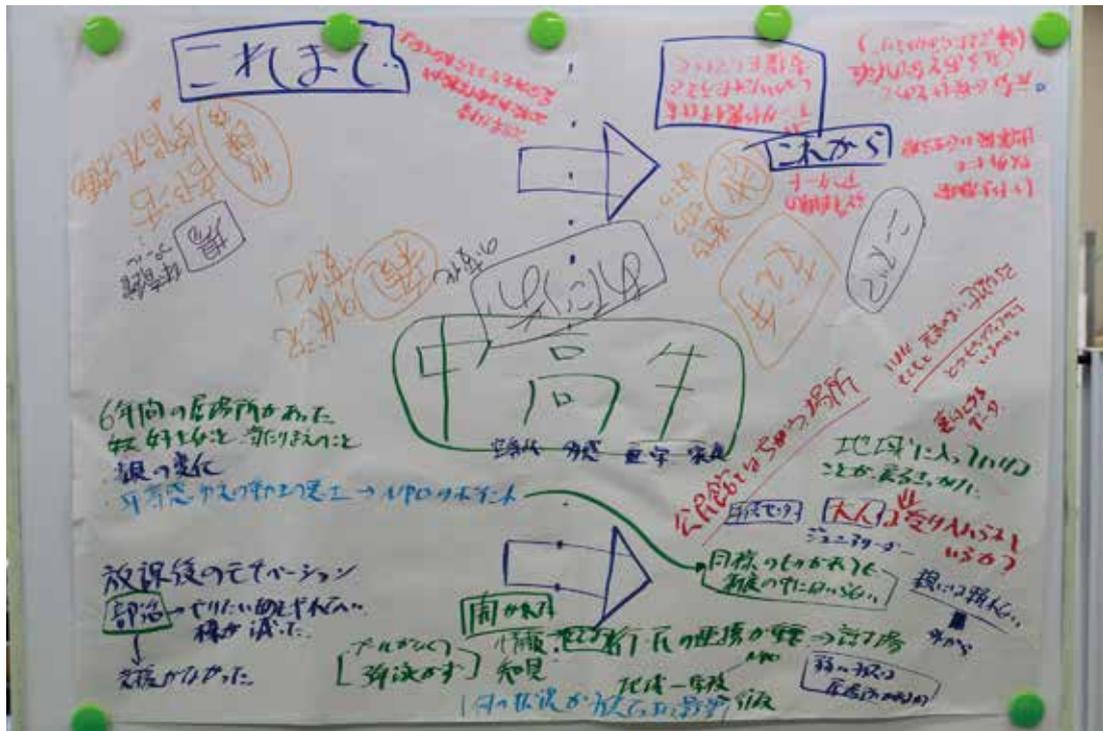
これからやりたいこと！

- ・ 自主性を育む（学習手段など→目標）←大人のサポート
- ・ 子どもが「自分の思いが叶う」という経験
- ・ 子どもの視点＝「できる！」
- ・ 地域づくり←子ども＋大人
- ・ 高齢者と子どもの同時サポート（学習を通して）

7. 記録：年代別グループワーク発表（模造紙）

- 子どもを軸としたコミュニティ作り
- 子ども会づくり
- 居場所づくりの継続
- 地域を支えるシステム作り
- 子どもの遊び場を通じたコミュニティの復旧、暮らしやすい街づくり
- あそび場の継続→プレワーカー育成→運営費の確保
- 地域による地域の人材育成
- 子ども版地域包括ケア
- 復興におけるあらゆる分野（福祉、まちづくり、公園づくり）での子ども参加の実現
- あそび場の必要性の認知度を高める
- 地域に学び地域に生かす仕組みづくり
- 子どものまちづくりへの参画
- 不登校児受入れ

C. 中高生グループ①



これまで

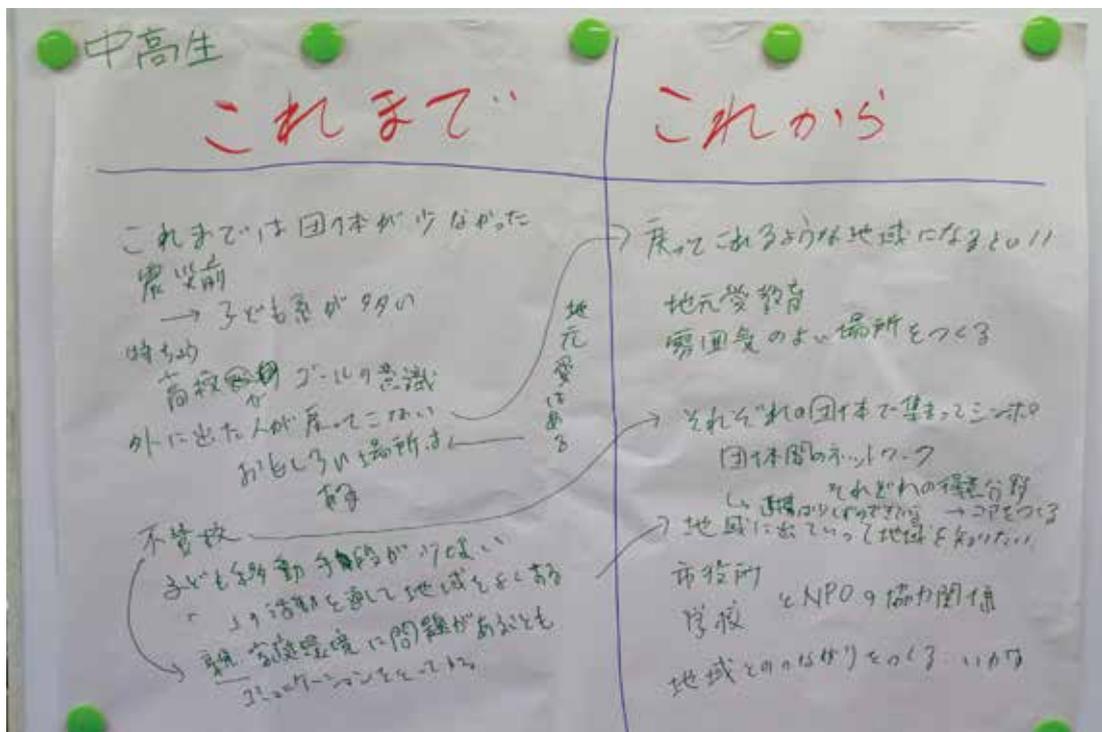
- 中高生（空気よむ、多感、進学、家庭）
- 2011年以降20校ある中学校が足なみをそろえられなくなった
- 当たり前の変化
- 親の状況変化
- 場（体育館、プール）、放課後（部活、学習外活動）
- 6年間の居場所があった。好きなこと、当たり前のこと
- 親の変化
- 平等感ゆえの動きの悪さ→NPOのポイント→同様のものがあっても制度の中にはいない
- 放課後のモチベーション（部活→支援がなかった、やりたいものもやれない、絆が減った）
- プールがなくて3年泳がず、開かれた情報、知見→とどまり（行・民の連携が重要）→話す場（学校+地域、行政、NPO）
- 弱い子どもは居場所があるか？
- 何の状況が子供たちに影響

7. 記録：年代別グループワーク発表（模造紙）

これから

- 支え手（財 断ち切られたら…）
- ニーズ？
- データや裏付けをしっかりとみたくうえで、支援をしていく
- 元気で受けとめてくれるおとなの存在（帰ってきたらお帰り）
- けやき教室以外にも出席扱いできる場
- 子ども自身のアンケート
- 公民館とはちがう場所
- いままで元気のない子供たちをもともとどうピックアップしているのか
- 裏付となるデータ
- 子どもセンター
- 地域に入っていけることが戻るきっかけに→大人（ジュニアリーダー）は受け入れられているか？
- 親には頼れない→外から

D. 中高生グループ②



これまで

- これまでは団体が少なかった
- 震災前→子ども系が多い
- 特ちょう→高校生がゴールの意識、外に出た人が戻ってこない
- 地元愛はある→おもしろい場所はある
- 不登校→親・家庭環境に問題があることも
- 子ども移動手段が少ない
- 「 」の活動を通して地域をよくする
- コミュニケーションをとっている

これから

- 戻ってこられるような地域になるといい
- 地元愛教育
- 雰囲気の良い場所をつくる
- それぞれの団体が集まってシンポ
- 団体間のネットワーク→連携は少しずつできて
- いる→それぞれの得意分野コアをつくる
- 地域に出ていって地域を知りたい
- 市役所、学校とNPOの協力関係
- 地域とのつながりをつくる、いかに

E. 大学生（20歳前後）グループ



これまで この3年ぐらゐの変化など

- ・ この3年間で子ども→市民になった
- ・ 支援の対象外で親を亡くしていたので高校卒業した子どもたちの「心のケア」が受け入れられなかった
- ・ 当時高校生の子もたちが20代前後になり支援の対応が行政から受け入れられなくなっている
- ・ それって単位が取れるから? 純粋にボランティア? とモンモンした事もある。→復興ボランティアの学生がたくさん来て子供と遊んでくれた→喜んでた。
- ・ カウンセリングルームが予約でいっぱい (3ヶ月先まで男女とわず)

- ・ 生き辛さ (必要とされている、依存傾向、死にたい)
- ・ 大学が息苦しい (サークルさかんではない、人間関係、つまづき)
- ・ 3割が進路未定で卒業 (入学の1割中退する)
- ・ ボランティア、プレッシャー
- ・ 地元好、地元嫌
- ・ 外の人 (若者含む) がたくさん入ってきた
- ・ 地元への関心が多くなった
- ・ 住むところがない…。(家賃高っ!!)

これから どんなことがあってくるか

- ・ 将来地元で活躍する人が増えていきそう。
- ・ 地元を支える若者への期待が大きい
- ・ 世代交代…加工会社も2代目もちらほらいる…若者雇用!!
- ・ 専修大に期待する
- ・ 専修大付属高校が欲しい
- ・ 企業との連携が石巻の発展に影響する
- ・ 漁業・農業・商業という石巻地域の連携によ

- ・ り若者の就労が増える
- ・ 石巻市を国際的な都市へ
- ・ 若者の期待が大きすぎると…大人が支援していかないと
- ・ 全日制以外の選択肢…
- ・ 自殺率増!?
- ・ 流出像!?
- ・ 大学がつぶれる!?

F. 20代グループ ～これまで～



20代をめぐり主役になっていくプロセス

暮らし

- ・ 仕事と家の往復の 20 代
- ・ 定住政策
- ・ けっこん・出産
- ・ +αするには生活きばん（仕事・家庭）やりたいノウハウ



- ・ 交流、役割、学び→同世代、多世代
- ・ 財源？人材？場所？やりがい？



きっかけ

- ・ 動き出した（気づき始めた）20 代
- ・ 他世代との関わり
- ・ 子ども（小～中学生）には関心が高い



震災と他者との出会い

- ・ 震災をきっかけにまちに愛着
- ・ 市外・県外の人々の視点
- ・ 石巻の良い所を再認識したい



地域の再発見

- ・ 意外と“地元愛”がある
- ・ 当事者意識
- ・ 20 代が未来を意識していけるのか
- ・ 今がチャンス

- ・ あるもの探し（地域の魅力再発見）



主役になっていく

- ・ 引きこもり中の親も外の人と会いたがらない
- ・ 石巻の 20 代に必要なことは？
- ・ テーマ別コミュニティ、音楽
- ・ まちづくりの担い手



活躍の場

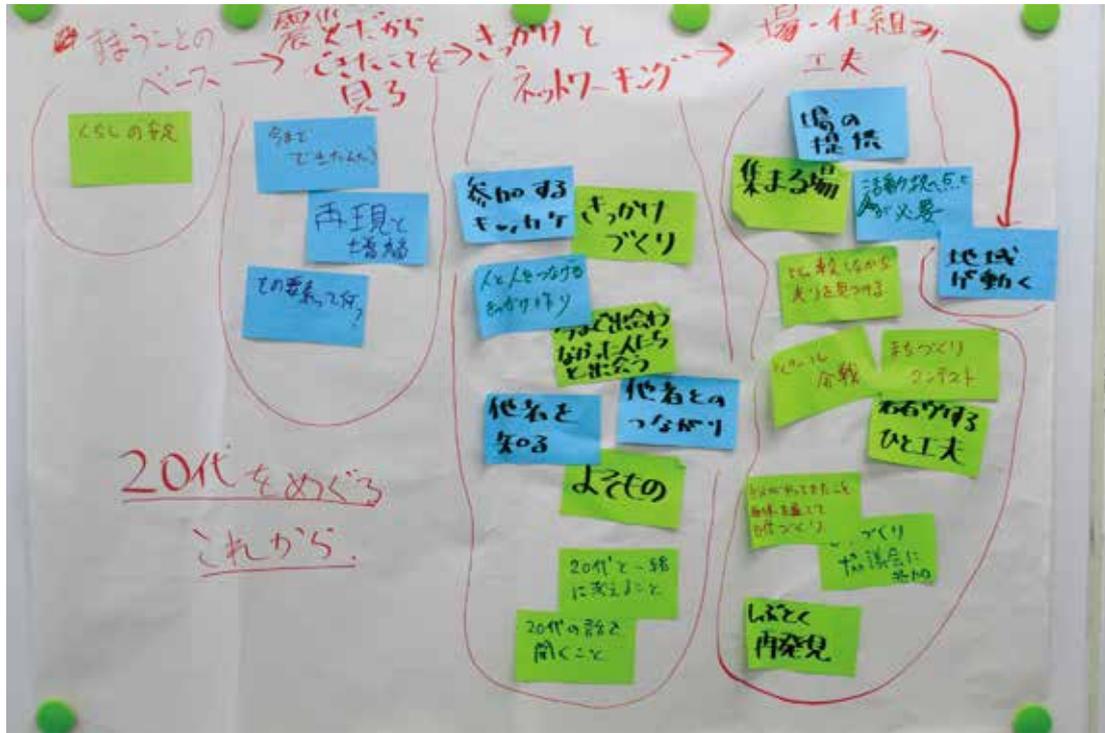
- ・ 石巻地域若者→サポートステーションで「親の会」は色々な出会いを与えられている
- ・ サードプレイス
- ・ 場を維持するのに必要な事
- ・ 場（機会）をどう作るか？
- ・ 自治会青年部



環境整備

- ・ 石巻をつくっていききたいという思いづくり
- ・ 20 代が地域の中で取り組めることは
- ・ 実行力がイマイチ…
- ・ 担い手育成
- ・ 期待は大きい
- ・ 20 代を対象として見ているのではないが
- ・ 弱者サポート←社会へ入っていく

F. 20代グループ ～これから～



20代をめぐるこれから

すまうことのベース

- ・ 暮らしの安定

↓

震災だからできたことを見る

- ・ 今までできたんだ!!
- ・ 再現と増幅
- ・ その要素って何?

↓

きっかけとネットワーク

- ・ 参加するキッカケ
- ・ きっかけづくり
- ・ 人と人をつなげるきっかけ作り
- ・ 今まで出会わなかった人たちと出会う
- ・ 他者を知る
- ・ 他者とのつながり
- ・ よそのもの
- ・ 20代と一緒に考えること

- ・ 20代の話聞くこと

↓

場・仕組み工夫

- ・ 場の提供
- ・ 集まる場
- ・ 活動拠点と武器? 仕事? が必要
- ・ 比較しながら光を見つける
- ・ アピール合戦
- ・ まちづくりコンテスト
- ・ 若者ウケするひと工夫
- ・ 自分がやってきたこと、趣味を通して自信づくり
- ・ まちづくり協議会に参加
- ・ しぶとく再発見

↓

- ・ 地域が動く

発行者：寄りあいNIPPON実行委員会

発行所：公益財団法人 地域創造基金さなぶり

〒980-0804 宮城県仙台市青葉区大町1-2-23桜大町ビル303

Tel. 022-748-7283 Fax. 022-748-7284 E-mail. event@sanaburifund.org
